
ホットニュース(平成14年度／第52号)

●今月の業界ホットニュース／人口減少時代

先週まで日経新聞のゼミナール欄で、「迫る人口減少時代」というシリーズが掲載されていた。予測値の前提条件のもつ課題を含めて、人口減少社会の様々な課題が掲げられていた。おりから高速道路の民営化に関して、人口が減少するのに、なぜある時期まで交通量が増加するのかという疑問が記事になったりしていた。いずれにせよ、人口減少は確実であり、将来を語るうえでの大前提でもある。

先日たまたま歴史人口学の鬼頭宏上智大学教授の講演を聴く機会があった。日本の歴史のなかで、人口の減少・停滞期は過去3回あったそうだ。縄文から弥生にかけて、平安から室町にかけて、および江戸の中期から幕末にかけてである。大雑把にいうと、従来の生産・経済システムによる人口扶養力が限界に達し、新たなシステムが確立するまでである。そして新たなシステムが確立すると、これまでは対数的な人口増に繋がっている。

現在の閉塞感を打破する新たなシステムが望まれるところであるが、これは必ずしも一国の経済力や人口扶養力に繋がるものではなくても、国民の豊かさの実感に繋がるようなものであれば良いのではないだろうか。その意味では、当面確実視されている人口減少期を肯定的にとらえ、停滞期であった平安時代や江戸時代に日本独自の文化を創り出した背景に、学ぶべきことが多々あるようであり、とくに地方のまちづくりに活かせるのではないかと思う。

(代表取締役 堀田 紘之)

●交通バリアフリー基本構想の策定と市民参加

交通バリアフリー法に基づく基本構想の策定状況は「HotNews No.50」でも紹介したが、4月以降、新たに7市町が国へ提出しており、これで国が受理した基本構想は22件となった。

基本構想の策定にあたっては、高齢者、障害者等を含む利用者の参画によりその意見の反映に努めることが同法の附帯決議に定められており、これまで基本構想を策定した22の市町をみると、主に次のような方法により高齢者、障害者等の意見の反映に取り組んでいる。

- 1)基本構想策定の委員会や協議会等に高齢者団体、障害者団体、公募による市民等のメンバーが参画
- 2)高齢者、障害者等を含めた市民参加による現地のバリア点検等
- 3)高齢者、障害者等へのアンケートやヒアリングの実施
- 4)広報やホームページに交通バリアフリーの記事を掲載して意見を募集

昨年度、私が担当した相模原市の基本構想策定においても、上記のうち、1)、2)、4)を実施している。特に2)の現地点検については、高齢者、障害者、地域住民、交通事業者、市職員など約80名の参加者が5つのグループに分かれ、駅、駅前広場、駅周辺の道路などの点検を行い、健常者では気付にくいバリアの実態を把握するとともに、バリアの改善、バリアフリー化の際の留意点などを話し合い、それらの意見を基本構想に反映させた。

前述の22の市町のうち、1)についてはほぼ全部の市町が、2)～4)については半数程度の市町が実施しており、各市町においても高齢者、障害者等を含む市民参加のもと基本構想策定を行っている。

今後は、整備後の結果についても、市民と事業者と一緒に評価・検証を行っていくことが必要だと思う。その結果の蓄積と次の計画へのフィードバックが、交通のユニバーサルデザインの実現に必要と考えられる。

(総合計画部 永元 真也)

●都市計画キャラバンin平戸はじまる

NPO法人 日本都市計画家協会主催による都市計画キャラバンがはじまる。94年長岡、95年掛川、96年丹羽、97年東松山、98年前橋、99年古河、00年浜松、01年福島、そして今年には長崎県平戸市での大会である。キャラバンとは、同協会が毎年、ある都市や町をとりあげて、その地の住民・市民・行政と都市計画家協会会員が一緒になって、まちづくりを考えるイベントである。

今大会の特徴は開催地が本州ではないこと。協会メンバーが赴くこととなるが、東京からの行程は羽田

～(飛行機)～福岡～(地下鉄・JR)～佐世保～(バス)～平戸であり、時間によると約7～9時間かかる。そのため九州方面の協会メンバーが中心となる。

今大会の狙いは、“平戸まちなみ探検隊”を市民・市・県・協会で構成し、まち探検で宝物探しを行い、これを市民で共有し街づくり意識を高めるところにある。7月～11月まで毎月1回の開催であるが、毎土・日開催のため総合学習による子供たちの参加が可能となり、これまでのキャラバンとはひと味違う面白さが期待できそうだ。なお当社からは、私と第1計画室長の坂井が参加する。

今大会の情報は、以下のホームページで入手することができる。

協会HP (<http://www.mmjp.or.jp/jsurp/hirado/hirado.htm>)

平戸市HP (<http://www02.so-net.ne.jp/~hirado/>)

(都市計画部長 高尾 利文)

● 青年海外協力隊レポートvol.13～モロッコの民芸品1
・焼き物の町サフィ

モロッコと聞いて思い浮かべる民芸品って、どんなものがあったらう？ 多分、日本にいた頃には、革製品とか絨毯とかを思い浮かべていたような気がする。聞くところによると、最近日本でもモロッコの小物を扱うお店が出始めているとか。どんなものを置いているのか逆に気になるところである。

さて、モロッコでは、革製品もさることながら、陶器作りも盛んである。中でもフェズ、サフィ(大西洋岸の海辺の町)、サレ(首都ラバトの隣)は陶器作りで有名な3大都市である。特にフェズは、モロッコで陶器作りが最初に始まった都市であり、「フェズブルー」と呼ばれる青一色で絵付けのされた陶器が有名である。サフィで陶器作りが始まったのは約1世紀くらい前で、フェズの陶器職人がサフィに移って工房を開いたことに始まる。その後、独自の発展を続け、最近では青以外の新しい色、柄の陶器を見ることができる。サレは首都に近いこともあり、現代的なデザインの陶器が多い。

この3都市の中でもサフィは、メディナ(旧市街)の門の前に工房区を形成しており、作業中の工房を覗いたり、焼き釜から上る煙を眺めたりすることができる、いかにも焼き物の町といったところである。工房区の前には直売店が軒を連ね、各工房毎に特色のある作品を見ることができる。

しかし、モロッコの陶器の難点は、実用的ではないところである。よく陶器屋の売り子などは、乗っても割れない(くらい丈夫)というパフォーマンスをするのだが、実は焼く際の焼成温度が低くて上薬がうまく焼けないことから鉛か何かの成分が残ってしまい、熱いものや酸に触れるとそれが溶け出してしまうという欠点を持っているのである。そのせいかな否か、飾り皿として使われることのほうが多く、日本の陶器と同じ感覚で食器として使うには、少し注意が必要である。

(都市計画部 酒井 夕子)

アルメックホットニュース(平成14年7月15日発行)

////////////////////////////////////